

宮本百合子選集

5

道

標

第 一 部

第 二 部

河 出 書 房

宮本百合子選集

5

道

標

第一部

第二部

河出書房

宮本百合子選集

5

道標 第一部・第二部

第7回配本

昭和三十一年十一月一日 印刷
昭和三十一年十一月五日 發行

定價二五〇圓
地方價 二六〇圓

著者 宮本百合子

發行者 河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者 山元正宜
東京都文京區柳町二六

發行所

株式會社

河出書房

東京都千代田區神田小川町三ノ八
振替口座東京一〇八〇二番
電話(29)三七二一番(代表)

印刷・三晃印刷KK

製本・美行製本所

目次

目次

道	標 第一部	1
第一章		三
第二章		一六
第三章		一七〇
道	標 第二部	二九
第一章		三一
第二章		三三〇

道

標

第一部

第一章

からだの下で、列車がゴットンと鈍く大きくゆりかへしながら止つた。その拍子に眼がさめた。伸子は、そんな氣がして眼をあけた。だが、伸子の眼の前のすぐそばには緑と白のゴバン縞のテーブルかけをかけた四角いテーブルが立つてゐる。そのテーブルの上に伸子のハンド・バッグだの素子の書類入艚だのがごたごたのつてゐて、目をうつすと白く塗られた入口のドアの横に、大小數個のトランク、二つの行李、ハルビンで用意した食糧入れの柳製大籠などが、いかにもひとまづそこまで運びこんだといふ風に積みあげられてゐる。それらが、薄暗い光線のなかに見えた。素子は伸子の位置からすればTの型に、あつちの壁によせておかれてゐるベッドで睡つてゐる。それも、やつぱり薄暗い中に見える。

ここはモスクワだつたのだ。伸子は急にはつきり目がさめた。自分たちはモスクワへついてゐる。

——モスクワ——。

きのふ彼女たちが北停車場へ着いたのは午後五時すぎだつた。北國の冬の都會は全く宵景色で、驛からホテルまで來るタクシーの窓からすっかり暮れてゐる街と、街路に流れてゐる灯の色と、その灯かけを掠めて降つてゐる元氣のいい雪がみえた。タクシーの窓へ顔をびつたりよせてそとを見てゐる伸子の前を、どこか田舎風な大きい夜につつまれはじめた都會の街々が、低いところに灯かけをみせ、時には歩道に面した半地下室の店の中から扇形の明りをばつと雪の降る歩道へ照し出したりして通りすぎた。通行人たちは黒い影繪となつて足早にその光と雪の錯綜をよこぎつてゐた。それらの景色には、ヨーロッパの大都市としては思ひがけないやうな人懷こさがあつた。

けふはモスクワの第一日。——その第一瞥。——伸子はこみ上げて來る感情を抑へきれなくなつた。ベッドのきしみで素子をおこさないやうにそつと半身おきあがつて、窓のカーテンの裾を少しばかりもちあげた。そこへ頭をつつこむやうにして外を見た。

二重窓のそとに雪が降つてゐた。伸子たちがゆうべついたばかりのとき軽く降つてゐた雪は、そのまま夜ちゆう降りつづけてゐたものと見える。見えない空の高みから速くどつさりの雪が降つてゐて、ひろくない往來をへだてた向ひ側の大工事の足場に積り、その工事場の入口に哨兵の休み場のために立つてゐる小舎のきのこ屋根の上にも厚くつもつてゐる。雪の降りしきるその横町には人通りもない。

きこえて来る物音もない。そのしづかな雪降りの工事場の前のところを、一人の歩哨が銃をつり皮で肩にかけてゆつくり行つたり來たりしてゐた。さきのとんがつつた、赤い星のぬひつけれられたフェルトの防寒帽をかぶつて、雪の面とすれすれに長く大きい皮製裏毛の防寒外套の裾をひきずるやうにして、歩哨は行つたり來たりしてゐる。彼に氣づかれることのない三階の窓のカーテンの隅からその様子を眺めおろしてゐる伸子の口元に、ほほえみが浮んだ。ふる雪の中をゆつくり歩いてゐる歩哨は、あとからあとからとおちて来る雪に向つて、血色のいい若い顔をいくらか仰向かせ、わざと顔に雪をあてるやうな恰好で歩いてゐる。若い歩哨は雪がすきらしかつた。自分たちの國のゆたかで莊重な冬の季節を愛してゐて、體の暖かい若い顔にかかる雪がうれしいのだらう。雪のすきな伸子には、歩哨の若者が顔を雪にあてる感情がわかるやうだつた。

「——ぶこちゃん？」

うしろで、目をさましたばかりの素子の聲がした。伸子はカーテンをもち上げてゐたところから頭をひつこめた。

「めがさめた？」

「あーあよくねた、何時ごろなんだらう」

さう云へば伸子もまだ時計をみてゐなかつた。

「八時半だわ」

素子は一寸の間黙つてゐたが、ベッドに横になつたまま、
「カーテンあけてみないか」

と云つた。伸子は、重く大きい海老茶木綿の綾織カーテンを勢よくひいた。狭いその一室に外光がさしこんだ。雪のふりしきる窓の全景があらはれ、うす緑色の塗料でぬられてゐる彼女たちの室の壁が明るくなつた。しかし、その明るさは大い窓ガラス越しにふる雪の白さがかへつて際たつて見えるといふ程の明るさでしかなかつた。

「これちや仕様がな、ぶこちゃん、電氣つけようよ」

スワッチを押して、灯をつけてから、伸子はドアをあけて首だけ出すやうにホテルの廊下をのぞいた。くらい十二月の朝の氣配や降る雪にすべての物音を消されてゐる外界の様子が伸子にも珍しかつた。廊下のはづれにバケツを下げた掃除女の姿が見えるばかりだつた。廊下をへだてた斜向ひの室のドアもまだしまつたまま、廊下のはじにニッケルのサモワールが出してあつた。サモワールは、ゆうべ秋山宇一が彼の室へとりよせて瀬川雅夫などと一緒に、伸子たちをもてなしてくれたその名残りだつた。

ドアをしめて戻ると、伸子は腑におちない風で、

「まだみんな寝てるのかしら——」

と小聲を出した。

「まるでひつそりよ」

「ふうん」

ゆつくりかまへてゐた素子は、

「どれ」

とおき上ると、わきの椅子の背にぬぎかけてあつたものを

一つ一つとつて手早く身仕度をととのへはじめた。

二人で廊下へ出てみても、やつぱり森閑として人氣がない。伸子たちは、ドアの上に57といふ室番號が小さい楕圓形の瀬戸ものに書いてある一室をノックした。

「はい」

几帳面なロシア語の返事がドアのすぐうしろでした。素子がハンドルに手をかけると同時にドアは内側へひらかれた。

「や、お早うございます。さあ、どうぞ……」

ロシア革命十周年記念の文化國賓として、二ヶ月ばかり前からモスクワに来てゐる秋山宇一は、日本からつれて来た内海厚といふ外語の露語科を出た若いひととずつと一緒だった。ドアをあけたのは、内海だった。

「どうでした——第一夜の眠り心地は……」

窓よりに置いたテーブルに向つて長椅子にかけてゐる秋山宇一が、ちよつとしやれた工合に頭をうなづかせて挨拶しながら伸子たちにきいた。

「すつかりよく寝ちまつた……なかなか降つてるぢやありませんか」

素子がさう云ひながら近づいて外を眺めるこの室の窓は二つとも大通りの側に面してゐて、まふやうに降る雪をとはして通りの屋根屋根が見はらせた。

「今年は全體に雪がおくれたさうです。——四日だったか

な、初雪がふつたのは——」

すこし秋田訛のある言葉を、内海は、ロシア語を話すときと同じやうに几帳面に發音した。

「もう、これで根雪ですね。一月に入つて、この降りがやむと、毎日快晴でほんとのロシアの嚴冬がはじまります」秋山も、はじめてみるモスクワの冬らしい景色に心を動かされてゐるらしかったが、

「ぢや、瀬川君に知らせませうか」と、内海をかへりみた。

「朝飯前だったんですか」

「ええ。あなたがたが起きられたら、一緒にしようと思つて」

「まあ、わるかつたこと」

きまりのわるい顔で伸子があやまつた。

「わたしたち寢坊してしまつて……」

「いや、いいんです。私もだつて、さつき起きたばつかりなんですから……しかしソヴェトの人たちには、とてもかなひませんね、實に精力的ですからね。夜あけ頃まで談論風發で、笑つたり踊つたりしてゐるかと思ふと、きちんと九時に出勤してゐるんだから……」

そこへ、黒背廣に縞ズボンのきちんとした服裝で瀬川雅夫が入つて來た。日本のロシア語の代表的な専門家として瀬川雅夫も國賓だった。演劇専門の佐内滿は十日ばかり前にモスクワからベルリンへ立つたといふところだった。

「お早うございます。——いかがです？　よくおやすみでしたか」

秋山宇一は無産派の藝術家らしく、半白の長めな髪を總髪のような工合にかき上げてゐる。瀬川雅夫は教授らしく髪をわけ、髭をたくはへてゐる。それはいかにもめいめいのもつてゐるその人らしさであつた。その人らしいと云へば内海厚は、柔かい髪をびつたりと横幅のひろい額の上に梳きつけて、黒ぶちのロイド眼鏡をかけてゐるのだが、その髪と眼鏡と上唇のうすい表情とが、伸子に十九世紀のおしまひ頃のロシアの大學生を思ひおこさせた。内海厚自身その感じが氣に入つてゐるわけではないらしかつた。

やがて五人の日本人はテーブルを圍んで、茶道具類をパン、バターなどをとりよせ、殆ど衣類は入つてゐない秋山の衣裳、箭筒の棚にしまつてあつたゆづべののこりの、鹽漬胡瓜やチーズ、赤いきれいなイクラなどで朝飯をはじめた。「ロシアの人は、昔からよくお茶をのむことが小説にも出て來ますが、來てみると、實際にのみたくなるから妙ですよ」

瀬川雅夫がさう云つた。

「日本でも信州あたりの人はよくお茶をのみますね——大體寒い地方は、さうぢやないですか」

もも前の啓蒙的な口調で、秋山が答へてゐる。

うまい鹽漬胡瓜をうす切れにしてバターをつけたパンに添へてたべながらも、伸子の眼は雪の降つてゐる窓のそとへ

ひかれがちだつた。モスクワの雪……活々した感情が動いて、伸子のころををしづかにさせないのであつた。雪そのものについてだけ云ふならば、ハルビンを出たシベリア鐵道が、バイカル湖にかかつてから大ロシアへ出るまで數日の間、伸子たちは十二月中旬の果しないシベリアの雪を朝から夜まで車窓に見て來た。それは曠野の雪だつた。雪と氷柱につつまれたステイションで、列車の發着をつげる鐘の音が、カン、カン、カンと凍りついたシベリアの大氣の擦きのなかに響く。白い寂寞は美しかつた。列車がノヴォシビルスクに着いたとき、いつものとほり外氣を吸はうとして雪の上へおりた伸子は、凍りきつてキラキラ明るく光る空氣がまるでかたくて、鼻の穴に吸ひこまれて來ないのにびつくりした。おどろいて笑ひながら、つづけて咳きをした。そこは零下三十五度だつた。雪が珍しいといふのではなく、こんなに雪の降る、このモスクワの生活が、伸子の豫感をかきたてるのであつた。

食事も終りかかつたころ、瀬川雅夫が、

「さて、あなたがたのけふのスケジュールは、どういふ風です？」

と、伸子たちにきいた。

「別にこれつてきめてはゐないんですがね」

きな粉色のスーツが黒い髪によく似合つてゐる素子が答へた。

「大使館へでも一寸顔だしして來ようかと思つてゐるんだ

けど。——手紙類を、大使館につけて受けとるやうにして来たから……」

秋山宇一は、黙つたままそれをききながら小柄な體で、重ね合はせてゐる脚をゆすつた。

「ぢや、かうなさい」

席から立ちかけながら、瀬川が云つた。

「もう三十分もすると、どうせ私も出かけてBOKCへ行かなけりやならない用がありますから、御案内しませう。BOKCは、いづれ行かなければならないところでせうから」

「それがいいですよ。BOKCを訪ねることは、重要ですよ」

濃くて長い眉の下に、不釣合に小さい二つの眼をしばたきながら、我からうなづくやうにして、秋山宇一が云つた。

「外國の文化人たちは、みんな世話になつてゐるんですから」

「ぢや、それでいいですね」

瀬川が實務家らしく話をうちきつた。

「BOKCからは大使館もぢきです」

BOKCといふのは、モスクワにある對外文化聯絡協會の略稱であつた。この對外文化聯絡協會は、ソヴェト同盟の各都市に支部をもつてゐるとともに、世界の國々に出張してゐる。仲子たちが旅券の裏書のことと東京にあるソ

聯大使館のなかに住むバルヰン博士に會つた。あの灰黄色の眼をした巨人のやうなひととBOKCの東京派遣員であつた。こんど、佐内、秋山その他の人たちが國賓として來てゐるのも、萬事はBOKCの斡旋によつた。

瀬川につづいて、出かける仕度に部屋へ戻らうとする仲子たちに向つて、茶道具がのつたままのテーブルのところから秋山宇一が、

「BOKCで、すごい美人がみられますよ。イタリ語と日本語のほかはあらゆる國語を話すんださうです。アルメニア美人の典型だね——まア、みていらつしやい」
笑ひながらさう云つた。

黒い羊のはららごの毛皮でこしらへたアストラカン帽をかぶり、同じ毛皮の襟のついた外套を着た瀬川雅夫について、素子と仲子とは雪の降る往來へ出た。ホテルの前の大きい普請場の入口を、いま一臺の重い荷馬車が入りかけてゐるところだつた。歩哨の兵士のきてゐるのによく似た裏毛の防寒外套の胸をはだけたまま、不精ひげの生えた頬つべたの兩側に防寒帽のたれをばたつかせたまま、馬子は、

「ダワイ！ ダワイ！ ダワイ！」

と太い聲で馬をばげまし、轡のところへ手をそへて自分も全身の力を出しながら、傾斜した渡板のむかふへ馬をわたらした。ダワイといふことは、呉れ、といふ意味だとならつた。馬子は、いかにも元氣の出さうな調子でダワイ、

「グワイと叫んだけれど、それはどういふ意味なのだらう。一足おくらせてゐた伸子に、

「ぶこちゃん！」

素子が大い聲でよんだ。ホテルを出たばかりの街角に三臺橋が客待ちしてゐた。その一臺に、素子がのりかけてゐるところだつた。日本風呂敷に包んだ大きい箱のやうなものをわきにかかへた瀬川雅夫が、素子と並んでかけた。

「ぶこちゃん、前へ立つんだよ」

「どこへ？」

「ここへ——十分立てますよ」

瀬川雅夫が、防寒上靴をはいた足をひつこめながら云つた。

「ほんの六七分のところだから大丈夫ですよ。却つて面白いぢやないですか。……ほら、かうして」

箱を素子にあづけ、瀬川は素子を自分の膝に半ばかけさせるやうにした。

三人をつみこんで橋は、トゥウェルスカヤの大通りへ向けてゐた馬首をゆつくり反對の方角へ向け直し、それから速歩で、家の窓々の並んだその通りを進みはじめた。いかにも鮮やかな緑色羅紗に毛皮のふちをつけた御者の丸形帽に雪は降りかかり、乗つてゐる伸子たちの外套の襟や胸にも雪がかかる。それは風のない雪だつた。橋はぢき、トゥウェルスカヤの大通りと平行してモスクワを縦にとほつてゐる一本の街すぢへ出た。そこは電車の通つてゐない商店

街だつた。パン屋。本屋。食料品店。何をうつてゐるのか分らないがらんとした幾軒もの店。ショウ・ウ・ウ・キンドウが一面白く凍つてゐて花の色も見えない花屋の店。店の前のせまい歩道では防寒用に綿入れの半外套を着、フェルトの長靴をはき、ふくらんだ書類鞆をこわきにかかへた男たちが、肩や胸を雪で白くしながら足早に歩いてゐる。茶色の毛糸のショールを頭から肩へかぶつた女たちが、腕に籠をとほして、ゆつくり歩いてゐる。向ひ藥の種をかんて、そのからを雪の上へはき出しながら散歩のやうにゆく少年がある。その街は古風で、商店は三階建てで雪の中に並び、雪の匂ひと微かな馬糞のにはひがしてゐる。伸子たちののつてゐる橋は、國立音樂學校の鐵柵の前を通りすぎ、やがて右側のひろい段々のある建物の前へとまつた。

三人で、その低い石段をのぼるとき、素子がかのはずみで雪の上で足をすべらし、前へのめつて、段々に手袋をはめた手をついた。素子はすぐ起き直つた。そのまま表玄関に入つた。

そこがBOKC^{ボック}の建物であつた。防寒靴を下足にあづける間も伸子は深い興味をもつてこの二十世紀初頭の新様式（ヌーボー）で建てられてゐる建物を見まはした。いづれは誰かモスクワの金持ちの私邸として建てられたものだらう。表玄関からホールを仕切る大扉の欄間がステインド・グラスで、そこにはカリフォルニア・ポピーのやうな柔かい花びの花が、大きくその蔓を唐草模様にして焼きつけら

れてゐる。そのステインド・グラスの曲線をうけて、見事な上質ガラスのはまつた大扉の枠も、下へゆくほどふくらみをもつた曲線でつくられてゐて、華やかなガラスの花をうける葉の聯想を興へられてゐる。すぐとつつきに、表階段があつた。その手すりは大理石だが、それもヌーボー式のぬらりとした曲線で、花の莖が長くのびたやうに出来てゐる。おそらくフランス風を模倣してつくられたものだつたらう。けれども、生粋にフランス風なひきしまつた線は裝飾のどこにも見當らなかつた。あらゆる線の重さとその分厚さがロシア風で、この屋敷の豪奢は、はつきり、ロシア化されたフランス趣味といふものを語つてゐるやうだつた。

對外文化聯絡のための事務所として、この建物を選定したとき、モスクワのその關係の委員會の人々はみんなこの建物を美しいと思ひ、外國から来るものに、觀られるねうちのあるものと思つて選んだらう。でも、その人々は、この建物の華麗が、フランス風を模しながら、こんなにもずつしりしたロシア氣質を溢らしてゐるといふ點の意味ふかい面白さ、殆どユーモアに近い面白みを、豫測しただらうか。

伸子は、一層興味を動かされて、ホールの左手にある一室に案内された。そこが應接室につかはれてゐて、もう數人の先客が、いくらか褪せた淡紅色のカーベットのの上に自由にはらばらおかれてゐる肘かけ椅子の上にかけてゐた。

もともここはやつぱり冬の客室につかはれてゐたらしく、曲線的なモーデリングのある天井は居心地よいやうに、暖い感じのあるやうに割合低く、奥ゆきのある張出し窓が通りに面してゐる。そこにシヤボテンの鉢植がのつてゐた。入つたつき當りにも出窓があり、その前に大型の事務用机が据ゑてある。事務机はもう一脚、あまりひろくないその室の左手の隅にあるきりだつた。そつちでは白いブラウスを着た地味な婦人が事務をとつてゐる。

秋山宇一が特別注意した美人といふのは、一言それと云はれないでもわかるほど、際だつた容貌の二十七八のアルメニア婦人だつた。黒のスカートにうすい桃色のブラウスをつけ、美しい耳環をつけ、陶器のやうに青白い皮膚と、近東風な長い眉と、素晴らしい眼と、圓くて、極めて赤い唇とをもつて、その室に入つたつき當りのデスクをうけもつてゐるのであつた。

「ああ、プロフェッソル・セガワ！」

てきぱきした事務的な愛嬌よさでそのひとは椅子から立ち上つた。そして、手入れよく房々たちぢらした黒い髪を頸のまはりでふりさばくやうにして、デスクのむかふ側から握手の手をのばした。それと同時に、新しい客としてそこに佇んでゐる伸子と素子の方へ、それぞれ笑顔をむけ、やがてデスクのうらから出て來て、握手した。

「これが、この事務責任者のゴルシユキナさんです」

そして、一人一人伸子と素子の専門と、ソヴェト旅行は

個人の資格で来てゐることを紹介した。

「ようこそおいでになりました」

美しいその人は、仕事に訓練された要領よさで、いきなり英語で仲子たちに向つて云つた。

「私たちは、出来るだけ、あなたがたの御便利をはかりたいと思ひます。——どのくらゐ御滞在になりますか」

素子が一寸躊躇した。仲子は、

「瀬川さん、すみませんが、かう返事して頂戴。私たちは旅費のつづく間、そして、ソヴェトが私たちを追ひ出さない限り、あるつもりですつて——」

「それは愉快です」

ゴルシュキナは笑ひ出して、仲子の手をとつた。

「ぢや、モスクワ觀光も、あんまりいそがないおつもり、といふわけでせうか」

「もちろんいろいろな場合、御助力いただかなければなりませんけれど、まあ段々に——。わたしは早くロシア語で蜜柑をやるやうになりたいんです」

「あら蜜柑がお氣に入りましたか」

こんどは仲子が笑ひ出した。ゴルシュキナは一緒に笑ひながら、その黒い、大きい、睫毛がきはだつて人目をひく眼に機智を浮べた。そして云つた。

「ソヴェト同盟を半年の間見物してね。最後に、一番氣に入つたのは鹽漬胡瓜だ、とおつしやつたお客様もありました」

瀬川雅夫は、ゴルシュキナに、カーメネフ夫人に會ひたと云つた。

「一寸お待ち下さい」

ゴルシュキナは、もう一つのデスクにゐる婦人に、ノートを書いてわたしながら、

「みなさんお會ひになりますか？」

ときいた。

「どうです、丁度いい機會だから會つておおきなさい」

仲子たちにさう云つて、瀬川は、

「どうか」

と、ゴルシュキナが書きいいやうに丁寧に吉見素子（ロシア文學專攻・翻譯家）佐々仲子（作家）と口述した。

これで、仲子たちとの用に一段落がつき、ゴルシュキナは、さつきから待つてゐた三人のアメリカ人に、出來て來た書類をわたして説明しはじめた。

そこへ、しづかな大股で、ひどく背の高くてやせて赭ら顔の四十がらみの男が入つて來た。

「こんにちは、プロフェッソル瀬川」

その聲をきいて、仲子は思はずそのひとを見直した。こんな低音でものを云ふひとに、はじめて出會つた。それが自然の地聲と見えて、ノヴァミルスキーといふその人は瀬川に紹介された仲子たちに、やつぱり喉嚨が胸の中にずり落ちてでもゐるやうな最低音で挨拶した。彼の手には、さつきゴルシュキナが、もう一つのデスクの婦人にわたした

水色の紙片がもたれてゐた。

「一寸おまち下さい」

その室を出て行つたノヴァミルスキーは程なく戻つて來た。そして、

「カーメネヅ夫人は、よろこんでお目にかかるさうです」

例の最低音で云ひながら、社交界の婦人にでもするやうに伸子たちに向つて小腰をかがめた。

ドアの開けはなされたいくつかの事務室の前をとほりすぎて、三人はその建物の奥まつた一隅に案内された。たつぷり首から上だけ瀬川より背の高いノヴァミルスキーが、一つのドアの前に立つて、内部へ注意をあつめながら慎重にノックした。若くない婦人の聲が低く答へるのがきこえた。ノヴァミルスキーは、ドアをあけ、

「プロフェッソル瀬川」

と聲をかけておいてから、

「さあ、どうぞ」

自分はそとにのこつて、ドアをしめた。

そこは、明るい灰色と水色の調子で統一された廣い部屋であつた。よけいな裝飾もよけいな家具もない四角なその廣間の左奥のところに立派なデスクがあつた。その前に白ブラウスに灰鼠色のスーツをつけた斷髪の婦人がかけて、書類をみてゐた。四十歳と五十歳との間ぐらゐに見えるものがつしりした肩幅の婦人は、瀬川や伸子たちが厚いカーベットの土を音なく歩いて、そのデスクから五六歩のそこ

ろへ來るまで、手にもつてゐる書類から視線をあげなかつた。

「こんにちは。お忙しいところを暫くお邪魔いたします」
いんぎんな瀬川の言葉で、その婦人は書類から目をあげた。

「こんにちは」

そして、椅子から立ち上つて、伸子たちに向つて、辛うじて笑顔らしいものを向けた。伸子には、彼女のその第一印象がほんとに異様だつた。男きやうだいのトロツキーにそつくりの重たくかくばつた下顎をもつてゐるカーメネヅ夫人は、じつと三白の眼で對手を見つめながら、奥齒をかみしめたまま努めて顔の上にはしてゐるやうな笑顔をしたのであつた。伸子は若い女らしく、ぼんやりした畏怖をその表情から感じた。

瀬川雅夫は、夫人のさういふ表情にももう馴れてゐるとみえて、格別こだはつたところもない風で彼女に丁寧に握手し、それから伸子、素子を紹介した。夫人は、

「お目にかかつて大變うれしうございます」

と云つたきりだつた。最近の觀光小旅行について瀬川がいかに大學生教授らしい長い文章で禮をのべ、それから立つて壁ぎはの椅子においてあつた風呂敷づつみをといて、大車にもつて來た二尺足らずの箱を運んで來た。その桐箱は人形箱であつた。ガラスのふたをずらせると、なかから、見事な本染めの振袖をつけ、肩に藤の花枝をかついで紅結

の塗笠をかぶつた藤娘が出て來た。瀬川は、一尺五六寸もあるその精巧な人形をカーメネヴ夫人のデスクの上に立たせた。

「おちかづきになりました記念のために。また、ソヴェトと日本の文化の一層の親睦のために」

暗色のカーメネヴ夫人の顔に、かすかではあるがまじりけのない物珍しさがあらはれた。

「大變きれいです！」

その言葉のアクセントだけに、感謝のころをあらはしながら、カーメネヴ夫人は、よりかかつてゐた回転椅子から上體をおこし、藤娘の人形を両手にとつた。

「——非常に精巧な美術品です」

カーメネヴ夫人は、ヨーロッパ婦人がこんな場合よくいふ、オオとか、アアとかいふ感謝詞は一つもつかはなかつた。

日本人形の名産地はソヴェトで云へばキエフのやうなキョトであること。この藤娘は京都の特に優秀な店で作つたものであること。人形の衣裳は、本仕度であるから、すつかりそのまま人間のつかふものの縮小であること。それらを瀬川はことこまかに説明した。

「もちろん、十分御承知のとほり、すべての日本婦人が毎日かういふ美的な服装はしてをりません——彼女たちの日常はなかなか辛いのですから……」

瀬川の説明をだまつてきき、それに對してうなづきなが

ら、カーメネヴ夫人は持ち前の三白眼でなほじつと、兩手にもつた人形を觀察してゐる。

こつちの椅子から、伸子たちが、またじつと、その夫人のものごしを見まもつてゐるのだつた。伸子には、人形をみてゐる夫人の胸の中をではなく、その斷髮の頭の中を、どんな感想が通りすぎてゐるか、きこえて來るやうな氣がした。色どりは絨美であやもこいけれども、全く生氣を缺いてゐてどこか膠の匂ひのする泥でつくられたその大人形は、カーメネヴ夫人の全存在と餘りかけはなれてゐた。夫人は、實際、好奇の心をうごかされながら、未開な文化に對する物めづらしさを顔にあらはしてみてゐるのだつた。

夫人は、ため息をつくやうな息づきをして、黙つたままそつと人形をデスクの上においた。

また、いんぎんな瀬川の方から、何か話題を提供しなければならぬ羽目になつた。

伸子は、段々驚きの心を大きくして、わきにある素子と目を見あはさないでゐるのには努力がいつた。こんなつき合ひといふものがあるだらうか。瀬川の日本人形が出されてさへ、夫人が、若い女性である伸子たちに、くつろいだ一言もかけないといふことは珍しいことだつた。夫人の素振りをみると、何も伸子たちに感情を害してゐるといふのでもないらしかつた。ただ、關心がないのだ。

さう思つてみると、カーメネヴ夫人のとりなしには、文化的であるが社交の要素も加味されてゐるこの文化聯絡協

會の會長といふ立場に、据わりきつてゐないところがあつた。この廣々として灰色としぶい水色で統一されたしづかな照明の部屋に一人ゐる夫人の内面の意識は非常に屢々、かうやつて言葉のわからない外國人に會つたり、國際的な文化の話をしたりすることは全く別などこかに集注されることがあるやうに感じられた。夫人は、彼女ひとりにわかつてゐる理由によつて萬年不平におかれてゐるやうだつた。

瀬川は、新しい話題をさがしてゐるやうだつたが、

「ああ、あなたがたのもつていらしたものがあつたんでせう？」

伸子たちをかへりみた。

「いま、出したらどうです」

心からのおくりものがとり出されるには、およそそくはないその場の雰圍氣だつた。しかし、素子が、いくらかむつとして上氣し、そのために美しくなつた顔で立ち上り、二人のみやげとしてもつて來たしほり縮緬の袂紗と肉筆の花鳥の扇子とをとり出して、カーメネヅ夫人のデスクの上においた。そして、彼女はロシア語が出来るのに、ひとことも口をきかないで、ちよつとした身ぶりで、それを差しあげますといふ意味を示し、その瞬間、ちらりと何とも云へない笑ひを口邊に漂べた。それは、カーメネヅ夫人の、奥歯をかみしめたまま顔に浮べてゐるやうな澁い鈍重な笑顔とは比較にならないほど、酸っぱい澁い鋭い微笑であつた。

た。伸子は素子のその一瞬の複雑きはまる口もとの皺をとらへた。伸子は、この部屋に案内されてからはじめてほんものの微笑をうかべた。

伸子たちのおくりものに對しても、夫人は、ごく短い一言づつで美しさをほめただけだつた。ありがたうといふ言葉は夫人として云はない習慣らしかつた。

かういふ贈呈の儀式がすむと、夫人は再び黙りこんだ。瀬川雅夫の言葉は自由でも、それを活用する自然なきつかけが明るい寒色の廣間のどこにもなかつた。三人は、そこで、會見は終つたものとしてそとに出た。

ドアをしめるのを待ちかねたやうにして、素子が、
「おつそろしく氣づまりなんです、文化聯絡つて、あんなものかい」

と、ひどくおこつた調子で云つた。

「どんなえらい女かしらないけれど、ありがたうぐらゐ云つたつて、こけんにかかはりもしまいのに」

瀬川はおどろいたやうに鼻の下の黒い髭を動かして、
「云ひましたよ！　ね、云つたでせう？」

並んで歩いてゐる伸子をかへりみた。

「さあ……わたしは、ききませんでした。——いつも、ああいふ人なの？」

「さうですか？　變だなあ、……云ひませんでしたか。云つたとばかり思つたがな」

「——まるで、言葉たまはる、みたいで、おそれいっ